

「忙しい生徒たちが長いスピーチや読書を好まないのは当然か？」

10月、とある県の市長が会合の挨拶で、「あいさつとスカートは短い方がいい」と発言して謝罪。もちろんハラスメント的にアウトなわけですが、前置きとしてもいまいち。どうせなら、例えば披露宴のスピーチ、「妻が殺されたらまずは夫が疑われます。それでも皆結婚したがるわけですが…」くらいパンチのある一言を。図に乗ってもう一つ。新聞社の祝賀会ならば、「わたくしがよく新聞を読むのは、新聞に書かれていないことを探すためですが…」これくらいひねれば、くすりと笑う人が一人くらいはいるかも知れませんね。冗談はさておき、テレビ番組では「一人の人間が三十秒以上話し続けると、視聴者はチャンネルを変えてしまうから、ディレクターは常に話す人を変えることに真剣になっている」という俗説があるくらい。やっぱり話は短い方がいいに違いありません。

ところで、長い話が嫌われるのは、忙しさのせいでしょうか。そう思うのは、若者を中心に現代人が時間対効果、「タイパ（タイムパフォーマンス）」を重視しているからに他なりません。映像を倍速で見るなんて当たり前。ヒット曲を作るなら、イントロは短め、すぐにサビを持ってくるのが鉄則だそうです。郡ようこ氏がエッセイの中で、編集者から「Tiktokで本を紹介する人がいて、そこで紹介された本が30年以上前のものであっても突然売れることがある」と聞いて、「15秒程度しか我慢できない人たちが、1冊の本を読み続けられるのかと首を傾げた」と書いていましたが、何より若者は長い話の先にある感動を楽しみに、何百ページを読むことは苦手かも知れません。ただし、文部科学省も読書量の大きな落ち込みの一因として、SNSや動画投稿サイトの普及を上げていますが、これは今に始まったことではないようです。常盤新平氏が1994年から連載したエッセイの中で「いつから日本人は歩きながら、また車に乗りながら電話をかけなければならないほど忙しくなったのか。新幹線のなかでは黙って城山三郎を読んでいろ。藤沢周平を読んでみる。つまらん電話をするな」と書いていますから、現代人が忙しそうにしていたことや本離れに関しては、少なくとも30年前からそうだったことが分かります。つまり、今の若者ばかり責めたら可哀想です。

さて、先日機会があって、宮中歌会始の選者三枝昂之氏の講演を聴きました。若者の本離れやSNSの短文テキストコミュニケーションを嘆きがちな私たちですが、氏は短文でコミュニケーションを取ることの多い若者の言語活動に注目して、若者の間での短歌作りの広がりやにまで言及されたのが実に刺激的でした。また、「にんじん」の著者ジュール・ルナールは「『空』のほうが『青い空』よりも雄弁である。形容詞は枯葉のように、ひとりでに落ちる」と言いましたが、何より「だめな長編とは、退屈が我慢の限界以上に引き延ばされたものである。だめな短編は、それが短いというだけで、はるかに礼儀にかなっている」という辛辣な言葉も残しています。少なくとも作歌や短編小説には、国語教育や文学への入り口として大きな可能性があるといえるかも知れません。

そうは言っても、長編小説の面白さは代えがたいもの。何百ページもの長い話の先にある何かを楽しみに読み続けるのも悪くはないです。そういう忍耐が良い本との出会いになった体験があれば、本好きがもっと増えるかも知れませんね。ならば、披露宴のスピーチで、「忍耐はきつと良い結果をもたらします」これはセーフ？アウト？

少し早いですが良いお年を。令和5年12月11日 大村城南高等学校長 中小路尚也